

Title	慶應義塾所在近世文人書簡筆跡類総覧(二) : 三田メディアセンター貴重書室(その一)
Sub Title	Transcripts of autographic letters and calligraphy works of pre-modern Japanese scholars and poets housed in Keio University (2) : the rare book room in Mita media center
Author	堀川, 貴司(Horikawa, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2015
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.50 (2015. ) ,p.161- 179
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本英史前文庫長・川上新一郎教授退職記念
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20150000-0161">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20150000-0161</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 慶應義塾所在近世文人書簡筆跡類総覧（二） 三田メデアセンター貴重書室（その一）

堀川 貴 司

## はじめに

平成二六年一月、佐々木孝浩氏を通じ、三田メデアセンター貴重書室の筒井利子氏より、古くからの未整理本のなかに書簡類等の軸物がいくつかあるので見て欲しいとの連絡を受けて、大まかな調査を行った。二七年一〇月、貴重書として整理されたのを機に、再度調査を行い、その内容を紹介することとした。翻刻掲載の許可を頂いた三田メデアセンター、調査等でお世話になった筒井利子氏に深謝申し上げる。なお、分量の多い古賀家関係のものは次回紹介の予定である。

## 凡例

- \* 取り上げた作品は順に通し番号を付す。合幅の場合は個々の作品に付す。
- \* 作品名は、図書館での命名に従い、さらに個別の作品について、書簡の場合「某書簡（某宛、某年某月某日付）」、漢詩文等の場合「某自筆「○○」詩懷紙」「某自筆七言絶句掛幅」などと私に命名し、自筆でないとは認められる場合は「（写）」を添える。
- \* 書誌は本紙の料紙（楮素紙の場合は記述しない）・寸法、箱書・附属文書を主とする。
- \* 解題は、成立年代、筆者の詩文集等所収作品の場合はそれと

の本文異同等を主とする。本文中の印記は解題に記す。

\* 翻刻は、原則として現在通行の字体を用い、句読点・ナカグロ・カギ括弧を補う。小字は〈 〉にて示す。虫損・破損等により欠けている文字は「□」「」<sup>レ</sup>、難読の文字は「■」とし、推読可能な場合は右傍に（ ）にて示す。明らかな誤字脱字の場合も同様に（ ）にて示す。特に必要場合は原本の改行や字配りのとおりとし、その他は原則としてオイコミにする。

〔荻生徂徠他書状十二通合幅〕

133X149/1

掛幅一幅。全一二通を合装したもの。紫檀軸、桐棧蓋箱入り。箱書、蓋表「諸名流國字牘合幅」、蓋裏に杉板（古い箱の蓋の一部か）を貼付、作者等について次のように記す。（便宜上、対象書簡の番号を付し、人名ごとに改行して示す）

(一) 茂卿（柳沢家臣姓物部／荻生物右衛門字茂公卿／号徂徠享保／十三年没）

(二・三) 服部小右衛門（字子選／号南郭／二通）

(四) 羽林君云々之書／太宰弥右衛門／字徳夫号／春臺

(五) 解冤云々之書

(六) 文仲様左膳／南郭門人両番／鶴殿土寧

(七・一二) 安脩（安達文仲／二通）

(八) 服部多門（南郭養子／字仲英）

(九・一〇) 大内忠太夫二通 号熊耳

(一一) 宇佐美恵助（字子迪／徂徠門人）

別筆にて貼紙三枚あり、「福島茂左衛門 岩村藩儒／号松江南郭門」「中根覚蔵 高遠藩儒／大内熊耳門」「安修 安達清河（名修／字文仲）／南郭門人」とある。それぞれ（二）（八）（七・一二）に関わるものである。巻止め下部に「國分文庫」（朱陽長方双辺、二・九×〇・九種）印記あり。戦前戦後、慶應義塾図書館員として活躍した国分剛二（一八九二～一九五八、『慶應義塾図書館史』慶應義塾図書館、一九七四、参照）の旧蔵である。なお同氏は『典籍』五（一九五二・一二）～一六（一九五五・四）に「名家書簡集」を断続的に連載しているが、今回紹介した資料は含まれていない。

一 荻生徂徠書簡（太宰春台宛、某年一〇月二〇日付）

一五・四×五七・六種（二枚継。以下、枚数に端裏切継分は含めない）。浅葱と薄茶の色替わり料紙を用いる。

(端裏切繼) 徳夫苦冷 茂卿拝

御手紙致拜見候。然者、碑石之儀被仰下、委細致承知候。碑身、方八寸与七寸九寸、何レ可然哉之由、異国ニも扁形も有之候間、七寸九寸も可然存候。殊ニ正方ニて八首を円クいたし候所、宜かるましく哉。円首与申候者、元来碑首与碑身与別ニいたし候事与相見申候。別ニ不致候ハ、只墨形杯ノ様、両角有之候、可然候半歟。愚存ハ御絵図之通成程可然存候。碑身碑首別ニ不致候ハ、神主杯之様、額をつけ候而も可然存候。然共物人多可有之候。只絵図之通成程能被存候。畢竟墓碑非古礼候。古下仏之物ニ候。然レハ浮世之事、強チニ不可拘泥候。只見つき宜様主意与存候。以上

十月廿日

二 服部南郭書簡(写)(福島松江宛、某年一二月二五日付)

一五・五×四〇・四種。不確かな字形多く、写しと見られる。「多門」は養子の白貴。

(端裏切繼) 福島茂左衛門様 服部小右衛門

寒甚候。闔家御平安と致恭喜候。然者、少々貴面御頼申諸事有

之候処、此節拙者も苦寒他行不得、多門も事多致在宿候故、以參得御意候事も難仕候ニ付、近頃自由なから、春初五六日迄之内、若此辺御次も候ハ、必御立寄可被下候。日々御勤番殊ニ伺近御繁多之節、今年と申候ては間も無之候間、春五日六日迄之内ニ懸御目度相願候。拙者ハいつも致在宿候。多門も春初二御年礼罷在候節、以參可得御意候得とも、日々ハ勤番御留守之儀難計、少々急キ事之故、今日御近所迄人遣候次ニ、此段一通得御意置候。以上

十二月廿五日

三 服部南郭書簡(安達惟惠宛、某年三月一五日付)

一四・九×二五・四種。宛名は清河とは別人か。

(端裏切繼) 安達惟惠様 服部小右衛門

拝見。弥御平安之段致恭喜候。然者、常産煙草五十把草御惠投、御旅館御取込之内厚意忝次第御座候。尚期面謝候条艸々不具。

三月十一日

四 大宰春台書簡(某宛、〔寛保元年(一七四二)某月某日付])

一七・三×六六・四種（二枚継）。日付・宛名がない上、奥に余白があるので、あるいは下書きであろうか。雅楽に関心のある高貴な公家の家臣に宛てたものであろう。「狛近任」は南都の楽人で、雅楽復興のため荻生徂徠・太宰春台と交流があり、江戸にも下向している。「徂徠集」（元文五年）『論語古訓』（元文四年）刊行に触れること、前年の閏月が七月（元文五年）であることなどの記述から、寛保元年のものと推定した。「楽書」については、『楽律全書』渡来をきっかけに徳川吉宗の諮問に答える過程で著された（したがって他見を禁じられていた）『南郭集』四編卷六所収「物夫子著述書目記」に「頗秘不許刊行」とある）『楽律考』を指すものか。これについては大庭脩「楽書校閲と荻生北溪・徂徠」（『日中交流秘話―江戸時代の日中間係を読む―』燃焼社、二〇〇三）に詳しい。

羽林君客臘十七日の御手書、狛近任伝致今春二月落手、謹捧読仕候。益御安全之旨奉恭喜候。去々年先師茂卿墨蹟進献仕候二付、去秋七月被下御手書、近任伝致閏七月落手、捧読仕候。度々奉接尊書、冥加之至忝仕合不勝感戴候。早速可奉答之処、賤妻重病危篤二付内外廢事、遅引恐入候。拙作詩文被召候。可心台

命之処、往歳野詩奉瀆高明、爾後無御沙汰惶懼仕候。且近作進覽可仕物無御坐候。先師茂卿樂書之事、蒙御尋候。曾覚悟不仕候。答来問候事ハ有之候。則本集二載候而頃来板行仕候。（純）も好音律候て、横笛聊学習仕候へ共、未熟二御坐候。愚撰『論語古訓』入高覧候由、望外之大幸二御坐候。得御賞翫候て汗顔仕候。他ハ上木之物無御坐候。同門之輩著述近日未承候。

五（鶉殿士寧）書簡（某宛、某年五月一日付）

一七・一×五四・四種。差出人は六との筆跡の一致より推定。イタミ多し。

拝閱仕候。如貴命属晴御同意奉存候。貴恙之状痛悸之御事、乍去早速御起復之■、欣躍仕候。右二付、其後不被劳价候様被入御念候■御尤之御儀奉存候。先日被仰下候翌、文仲へ申通候所、廿二日參上可仕候■申聞候。携集可仕候与約束仕候。左様思召可被下候。尤刻限等其以前尚又可申達様申達置候。長日二御坐候間、從午時二而可然哉二奉存候。高意如何、思召も被成御坐候ハ、被御知可被下候。無左候ハ、最早不及御左右奉存候。及昏暮艸々奉復候。会期在近、万空面罄。不具頓首

五月望

六 鵜殿士寧書簡（安達清河宛、某年三月四日付）

一六・四×二四・〇糎（二枚継）。縹色刷不明文様下絵あり。

「仲緑」は石島筑波の字。

（端裏切継）文仲様 左膳

此間御過臨得閑談太慶此御事御坐候。愈御清嘉致欣幸候。然者、御頼申候印進申候間、乍御世話宜被仰達可被下候。仲緑作者追而御返可被下候。彫刻迄者余り煩候事ヲ憚候間、此方ニ而誰ソ頼可申候。万々其内期面整候。不具

三月四日

尚以慮ヲ申候事ニ無御坐候。以上

七 安達清河書簡（楽山宛、某年二月九日付）

一四・八×一六・三糎（二枚継）。冒頭で言及するのは、本幅三・六・一一の三通を指すものか。

（端裏切継）楽山様机下 安修

服翁・鵜公・字子廼和牘三通、篋中より出申候。并進上申候。且此栗図、古画と相見申候。御覧可被下候。万期拝顔頓首。

十二月九日

八 服部白賁書簡（中根東平宛、某年六月一日付）

一五・一×二五・一糎（二枚継）。

（端裏切継）中根覚蔵様 服部多門

如教監御疎闊ニ罷過候。暑中弥御清嘉ニ御勤被成候者、恭喜何極。鄙人仍旧罷在候。勿煩貴慮。被思召寄、時候御尋被下、御在産蕎麦御恵贈被下、厚誼不堪拜謝、名品早速賞味可仕、辱奉謝候。万廿一日辱臨節、御礼可申陳、草々所答不二。

六月十日

九 大内熊耳書簡（中根東平宛、某年六月一〇日付）

一四・八×二九・三糎（二枚継）。端裏に「メ」があるのが透けて見える。

（端裏切継）中根覚左衛門様 大内仲大夫

御清福可被成御坐珍重存候。然ハ、十五日詩会、拙宅故障之儀御坐候而十九日ニ相延申候。乍自由右思召可被下候。右得御意如此御坐候。外ハ右之段大概申遣候。左様思召可被下候。頓首

四月十三日

一〇 大内熊耳書簡（中根東平宛、某年九月二日付）

一五・九×二四・六種（二枚継）。浅葱・白の色替わり料紙を用いる。端裏に「メ」あり。「子迪」は宇佐美瀧水、「良介」は不明。

は水戸藩家老山野辺義胤（二七二了七七）、「列樹多宮」は不明。

（端裏切継）安達文仲様梧石 宇佐美恵助

先月者数度得芳意大慶奉存候。寒威烈相成候得共、愈御多福可被成御入恭喜奉存候。然者、水戸相公山野辺兵庫頭様御家中列樹多宮と申人、御門弟二相成り詩作等も致申度、不佞へ被頼候間、遣し申候。御逢可被下候。委曲ハ此人より可申上候。此義乍略義以手紙得貴意候。奉頼候。頓首

十一月晦日

（端裏切継）中根覚左衛門様 大内仲大夫

冷雨御清福可被成御坐奉存候。然ハ、今日子迪へ参候。御隙ニ御坐候ハ、時ハ思召次第御出被成間敷哉。子迪よりも申越候。

御報者如何、可承候。頓首

九月十二日

尚々良介も参候。

一二 安達清河書簡（宇佐美瀧水宛か、某年九月三〇日付）

一五・六×二七・一種（二枚継）。「梁公実」は明代の詩人、後七才子の一人梁有誉で、詩は「登黎惟敬山楼」（二首その二）の一節（『明七才子詩集』卷三所収）。「活法」は『円機活法』、詩学卷一・松風に「涼夜龍吟猛、虚庭鶴夢清」の対が見えるのが近い。

一一 宇佐美瀧水書簡（安達清河宛、某年十一月晦日付）

一五・三×三二・八種。端裏に「メ」あり。「山野辺兵庫頭」

（端裏切継）佐君机右 安脩

秋冷甚貴恙御快御入候哉、承度奉存候。先日文華会緩々得賢慮

奉大慶候。帰路御送被下、厚意不知所謝候。其節拙作再按、懸御日候。且龍吟ノ字ハ、梁公実詩ニ「苔逕雲泉松十尋、風回衆壑自龍吟」、其外「活法」松声ノ詩ニ鶴語ニ龍吟ノ対なども相見、松ヲ龍ニ比シ申候詩多ク御座候。万期拝顔候。頓首

九月卅日

一三 彌左次書簡（甚兄宛、某年正月二八日付） 登錄書名「彌左衛門書状」 133X146/1

卷子本一軸、軸長二二・〇糎。薄茶無地裂表紙（一九・六×二三・八糎）、無辺素紙題簽（字なし）、見返黄土色布目型押楮紙、牙軸、本紙一五・八×一一〇・三糎（四枚継）。端裏に「メ」あり。桐棧蓋造箱入。印記「大泉蔵」（朱陽布銭形、四・〇×二・五糎、見返）、「國分文庫」（卷末裏）。

幕末、江戸に出府した地方武士であろうか。手元不如意のため、「古川」からあなたの名前で借金してくれ、という依頼である。差出人・宛名とも伝未詳。

口上出前草々誌

昨朝も草々失敬いたし申候。扱毎度く申兼候へ共、御国より

廿四日御便ニハ無相違為登候筈ニ而、いか、いたし候哉、音信不通相困申候。間違無之筈ニ而延引之義ニ候へ者、廿九日ニハ屹と相違有之間しく候処、当月中と申時借いたし候分申訳無之、昨日も彼是工夫いたし候処、どふも余り不申、扱々指支申候。

仍而何共氣之毒いたし候へ共、何と歟甚兄之指支之振ニ而三へ御嘆、古川より一寸御借り被下候事ニハ相成ましく候哉。愚より三へ頼候而も宜候へ共、兼而御承知之頼置候分も有之、且又おかしなつり合も有之、申兼候間、どふか一御工夫御頼申度候。栄三郎一条義、昨夜辰早々承候処、長三郎日延願いたし、廿九日朔日方、御国出立とのよし、仍而ハ品川之任人も同行ニ而、夫なレハ延引可致、相困申候。是なり上候へハ、昨朝御心付之由も御坐候間、何と歟御都合も御頼可申積之所、夫もだめ、今明日之所ニ指詰候間、何卒古川之方御工夫可被下候。古ハ先達而も一兩度、三へ頼借用いたし候□も御坐候へ者、五両御坐候へハどふか間ニ合セ可申候。来月中旬と歟、又ハ御切（行間追加「御切米と申候而もあまりわり詰ニ候間、中■来月中之□可有哉」）米之節と申振ニ■よろしくハ毎度く急々之処ニ相成、御迷惑を相掛け氣之毒至極ニ候へハ、必至と指支、又々御かけ込申候。何と御工夫、返くも御頼申候。以上



正月廿八日

(端裏カ、喰裂継) 甚兄内用 彌左次

一四 [延宝五年詠臘梅報春詩卷] 133X147/1

卷子本一軸、軸長二九・五糎。金茶色菊唐草文緞子表紙(二八・四×二八・〇糎)、見返金切箔銀揉活散らし鳥の子紙、牙軸、本紙二八・四×二二九・四糎(二枚継)、薄茶色料紙。桐棧蓋箱入。印記「大泉珍藏」(朱陽孔銭形、一・九糎、見返・本紙継目)、「國分文庫」(卷末裏)。第八首第四句「花」字は料紙が一部欠損しているのを補填補筆してある。

延宝五年(一六七七)二月一八日に門生の田植郎において催された詩会の詩を集めたもので、第一首林鶯峰の作品は「鶯峰先生林学士詩集」巻一一に「臘梅報春(丁巳嘉平十八/日田植小集)」として収められる(本文異同なし)。印記は「林恕/章」「之道/父」で、ともに朱陰方一・六糎。第二首林鳳岡の作品も『鳳岡林先生全集』巻五一に「臘梅報春(遊田植舎)」として載り、異同なし。印記は「林印/戀」朱陽方二・一×二・〇糎、「整/字」朱陽方二・二×二・〇糎。なお二人とも、「書窓待雪」詩も同じ席で詠んでいるが、本詩巻にはない。第三首

の印記は「狛印/庸」朱陰方一・五糎。

「田植」は鶯峰の門生で、鶯峰の文集にたびたび名前が見え、江戸生まれ(巻一五「館生郷里記」、慶安元年(二六四八)生、姓は岸田(巻三六「示田植」、父親は清隆という名であり(巻四三「戒諭田植」、この翌年延宝六年には丹後の某藩に仕官が叶い任地に赴いた(巻一〇三「宋元明詩舊跋畀田植)」)ことなどがわかる。他の作者も羅山または鶯峰の門生である。

丁巳嘉平中八日田植小集詠臘梅報春

番信不違元氣新、暗香風度識芳辰、小寒一候花相約、復是殷正地統春

林学士(印)(印)

村外香清朶朶梅、臘天早識式春回、杜陵何独詠萱艸、疎影侵凌雪色開

林整字(印)(印)

早梅指示百花魁、不屑外辺霜雪堆、臘月方知春意動、孤根占暖一枝開

狛庸(印)

臘日影疎花欲匂、暗香送処喜津々、江南風暖回陽律、梅蕾一枝

先報春

高安成

崢嶸歲暮物皆陳、却怪暗香臘裡新、六出応呈三白瑞、前村先祝  
一枝春

林檎

横斜疎影數枝清、雪裏先看春意生、一樹梅花用秦曆、東風吹暖  
入嘉平

村顧言

前村深雪擁疎芭、風信報春朶々斜、臘裏先知回暖律、南枝吹發  
兩三花

島齊

疎影先知香暗通、臘天資始一番風、聯珠枝上得温潤、花筵前村  
深雪中

田植

〔太宰春台服部南郭書狀合幅〕

133X/148/1

掛幅一幅。牙軸（左欠）。外題打付墨書「春臺／南郭」両先  
生俗牘、その下部に印記「國分文庫」あり。

一五 太宰春台書簡（福田太室宛、某年三月七日付）

一五・九×四五・四糎（二枚継）。第一紙に多色刷山水下絵あり。端裏に「メ」あり。宛名の福田助右衛門は荻生徂徠の弟子で大垣藩儒の福田太室（？）一七五六、田俊卿ともいう。

（端裏切継）福田助右衛門様 太宰弥右衛門

為先日之御報御手紙忝拝見候。弥御堅固ニ被成御務恭喜不過之候。然者、安藤七次郎事御頼申進候処、何方へも被及御断候得共、格別ニ思召候間、御指南可被下由、千万於拙者忝次第ニ御座候。其旨七次郎方へ申遣近且其許へ参候様ニ可仕候。尤初心ニ御座候間、宜御引廻被遣可被下候。何茂期面謝候。以上

三月七日

尚々は迄特ニ御報被下候ほとこの事にも無御座之処、大なる御心遣ニ御座候。御丁寧之義致感喜候。以上

一六 服部南郭書簡（福田太室宛、〔宝曆三年（一七五三）〕五月二十七日付）

一五・七×五〇・九糎。『南郭先生文集』四編卷五「語田俊卿二孤序」によると、前年亡くなった太室が、四年前一二歳の

姉、六歳の弟の二人の子を連れてやってきて、その聡明さに驚いたという。日野龍夫『服部南郭伝笈』（ペリかん社、一九九九）三九〇頁では、この文章は前後の配列から暫定的に宝暦六年に置かれているが、太室没年の翌年であるから七年が正しいか。すると本書簡は同三年ということになる。なお弟は後に父の跡を継いで大垣藩儒となる少室である。

（端裏切継）福田助右衛門様 服部小右衛門

病余精神闕乏、文辞も難取出、秀緯墓銘之事も未得執筆候。漸向暑節御闔家弥御平安御暮可被成と致恭喜候。先以前日者御来祝、殊二令江始得相見、辱致大慶候。夙恵双珠、人間膝下之楽無比類、何れも致欣喜候。折悪紛冗之節而万々無風情、家人も残念かり申候。其内能隙ニ寛々遊戯ニ可被遣候。且又其節之肖像拙贊之事、少々存寄も有之、御断申度候。可蒙御免候。委曲貴面御物語可申陳候。先秘藏之物難留置、致返上候。右手指不如意、書字殊不整、伏乞諒察。

五月廿七日

一七 香川景樹書簡（松田本生宛、某年四月一九日付） 登録

書名「香川景樹書状幅」

133X/149/1

掛幅一幅。紫檀軸（右欠）、外題打付墨書「景樹翁書翰」、その下部に印記「國分文庫」。本紙一七・三×七三・五種（二枚継）、第二紙に黄・代赭色刷樹木下絵あり。宛先はもと鳥取藩医で維新後は宮内省等に出入した松田本生（一八一四〜八三三）。没年および維新後の閱歴については、影山輝国「まだ見ぬ鈔本『論語義疏』（四）」（『実践国文学』八四、二〇一三・一〇）が指摘するとおり、国立公文書館蔵公文録明治十六年三月分に含まれる「御用掛松田本生へ祭送料下賜ノ件」に記されている。景樹とは、同じ鳥取藩というつながりがあるが、具体的な関係は知られない。弥富破摩雄「香川景樹上京年齢考」（『近世国文学の研究』素人社書屋、一九三三）には、景樹上京の際に同伴した女性は妻包子である、と松田本生は高崎正風（著者の師）に語った、と記し、これを山本嘉将『香川景樹論』（育英書院、一九四二）は「松田本生は鳥取出身の有名な歌人医者でもあるから浮いた事を語るまいと思ふ」とその伝聞を事実と認定している。本書簡の存在は、本生と景樹の直接的な交流の明証であり、より信憑性が高まったと言えるよう。

代口

薄暑二候処益御壯氣被成御勤奉賀候。然者、先頃故大人御三回忌三付、御重之内御恵贈被下、辱御廻向仕候。其砌より別段不相勝、御正当二者甚不快、且親族共心痛之事抔差積、乍憚心外之御無音仕、不本意之至多罪御仁恕被下度候。扱々夢幻之世界今更ニ奉存出候。嗚御懷旧不少と奉察候。何ぞ蜂腰ニ而も相加、其御正日二者と存候も、空敷今以平臥、余り失礼ニ相成候ニ茂、一寸今日御断旁、病間漸執筆如此御坐候。御通題御坐候ハ、御序いつ二ても御<sup>〔可被下候〕</sup>可被下候。乍憚出詠仕度候。此一品、乍率爾御靈具ニ被加被下候ハ、本懐之限御坐候。余情拝顔申候。病中卒書御免所希上候。謹言以上

四月十九日

二白其節被仰下候御短尺、是亦延引、病筆殊ニ見苦敷候へとも相汚進上候。別ニ御断申入候。フト題ヲ相認候。失敬至極、先其儘呈上候。若不相然候ハ、御□他為取替候。以上

松田礼造様玉几下 香川長門介

一八 樺島石梁書簡（松平某宛、某年七月九日付） 登錄書名  
〔樺島石梁書狀幅〕 133X/150/1

掛幅一幅。紫檀軸、外題打付墨書「樺島石梁先生」、その下部に印記「國分文庫」。本紙二八・五×五七・三種、雲母引料紙。「鹿子尾」<sup>〔かごお〕</sup>は、石梁の故郷筑後久留米に近接する地名で、八女茶の源流となる茶の生産地。

奉書如尊諭爾後久不接<sup>〔開字〕</sup>紫眉。時下炎暑如焰御坐候処、<sup>〔開字〕</sup>尊疾益御清勝奉拵躍候。拙生無榮枯、乍憚御降心可被成下候。先日菅氏ニて同居生へ御伝声被成下、難有奉存候。佐能<sup>〔か〕</sup>ニも御逢被成候而、拙状をも御尋被下候由、拝謝々々。佐能<sup>〔か〕</sup>へは昨日も面会迄二同行仕、昼前より角地内記へ参り、内記ハ一昨日東帰ニて、互叙久闊、詩など作り合、相楽候事ニ御坐候。扱申後候。

御近辺之佳品颯々一覽、謹欣佳貺、北窓下義皇ノ眠を相助可申候。千万々々辱仕合奉存候。依旧八面旋風、御楽幾之由、欽羨々々。天下ノ楽事は二留り申候義と奉存候。尊作拝覽、不次擊節候。乍然寡聞ニてハ急々存当り不申候御句も有之候。緩々反復<sup>〔半〕</sup>慮ヲ奉願候。扱々御自在なる御事と、返而く奉感心候。小平儀<sup>〔か〕</sup>ノ御句、不覚嘖飯申候。公時辺諸先生ノ詩風共御

示被下、奉多謝候。西野先生ト申候ハ存寄不申候。其外たま

く其美玉ヲ見候も御坐候へ共、とくとも無御坐候故、忝而人々

一般ノ名工と而已存候迄ニテ御坐候。まして其本源ノ義、一向

心得不申候処、尊諭ニテ大意ヲ得申候。三■と申候も存不申候。

宋元無詩ノ義、恐人申候。中々左様なる鄙見一向無御坐候。惣

して宋元々々と鄙しむ人ハ口クセノ様ニ申歎ニ候得共、坡翁・

放翁などはしめ第一其人才緩急、腸中より吟出候計ニ候得共、

片言隻辞も常詞ニテハナキ筈ニ候。故ニ不佞ハ竊ニ謂ラク、宋

元無詩ニハアラス、今ノ世模擬ハ巧ナリ、宋元ノ真詩ハ絶テナ

シト。呵々。示諭ハ近來大痛頓首拝見。

松平公子侍史 七月九日 樺島勇七(花押)

二白弊邑鹿子尾山中ノ茗(名曰鷲)少々奉貢<sup>(同七)</sup>座下候。

〔藤田東湖和歌書状合幅〕

133X151/1

掛幅一幅。黒檀軸、外題打付墨書「藤田東湖尺牘」、その下部に印記「國分文庫」。桐印籠造箱入。

一九 藤田東湖和歌

三七・二×一一・八糶。末字「連」の終画を行間に長く撥ね

上げる。「東湖遺稿」には収めず、出典不明。

高久奈梨低岐九那留美乃浦能波

那弥乃安也阿類音古所妙南連(花押)

(高くなり低きくなるみの浦の波なみのあやある音こそ妙なれ)

二〇 藤田東湖書簡(鈴木〔主税〕宛、〔嘉永六年(一八五三)一〇月九日付〕

一五・六×三二・二糶と一五・六×三七・二糶の二紙を上下

二段に貼る(全長六九・四糶)。プチャーチンの長崎来航(七月

月)、ロシアによる樺太南岸の久春古丹占領(九月)に言及し

ていると見て、嘉永六年と推定する。東湖は長崎における交渉

のなかで占領について遺憾の意を表明すべきだ、と主君徳川齊

昭に進言している(日本史籍協会叢書『水戸藤田家旧蔵書類第

三』所収藤田東湖書案二四、嘉永六年カ十月廿七日付)。宛名は、

東湖の嘉永六年日記「統回天詩史料」(菊池謙二郎編『新定東

湖全集』博文館、一九四〇、所収)の同月前後に名前が見える、

越前福井藩士で松平慶永側近の鈴木主税であろう。

如論寒冷相催候処、愈御壯健被成御起居、欣慰不啻候。度々枉顧之処行違ひ、過日始而拜眉候のみ、寃晤にも不至遺憾此事二御坐候。爾來日夕如何にも匆忙、迎も此節ハ暇日無之、当月中旬過にハ少暇も出来可申、其節ハ枉顧にいたし度御坐候。長崎へ官人被相越候に付云々、御尋之趣いかさま右ハ承知仕候へ共、何事にて被相越候哉ハ心得不申候。魯夷云々、貴策十八条中の先見ニ符合、敬服々々。からふとへ異船(国名不詳)上陸よしハ承候へ共、えとろふへ暗夷渡來候事ハ未承。此節種々浮説も有之候間、一概にハ信用いたし兼候歟。芳韻三篇拝見、何れも正筆凜々、感服いたし候。退公之隙、独酌休福之節、擊節朗吟正氣培養可致、多謝々々。今朝も暁より認めいたし居候処へ、最早他より來書かさなり、乱毫草々頓首。

十月九日

鈴木賢契(復) 藤彪

二一 [鄭元偉詩幅]

133X/152/1

掛幅一幅。黒檀軸、外題打付墨書「中山鄭元偉(琉球第一書家)」、その下部に印記「國分文庫」。本紙四一・八×五六・〇浬。引首印「通徳堂」(朱陽長方三・二×一・六浬)、落款印「鄭印

／元偉」(朱陰方三・〇浬)「長烈」(朱陽方二・九浬)。筆者は琉球の書家(二七九二?)。詩は施肩吾「憶四明山泉」で、『全唐詩』卷四九四の本文とは声一深、是「目の異同がある。

(印)

愛彼山中石泉水、幽声夜々落空裏、至今憶得臥雲時、猶是涓涓在人耳

中山鄭元偉(印)(印)

[桂山彩巖他詩文卷]

133X/153/1

卷子本一軸、軸長二八・五浬。金葉色唐花立湧文緞子表紙(二七・七×二六・七浬)、見返金採箔散らし鳥の子紙、紫檀軸。外題金箔題簽墨書「君印」(下部のみ)。印記「大泉珍藏」(一四に同じ)「大泉藏」(一三に同じ)(共に見返と本文台紙の継ぎ目にあり)、「國分文庫」(卷末裏)。桐印籠造箱入。

二二 桂山彩巖自筆七言古詩

二七・七×一七・一八浬(二枚継)。薄茶色料紙。引首印は「湖春水」(朱陽長方三・五×一・一浬)、落款印は「鶴／汀

(陰)「桂義樹／字香公」(陽)(ともに朱方二・七種)。享保四年(一七一九)一〇月二五日作。蛻巖とは林家で同門、しばしば詩の贈答を行っていた。この年、蛻巖は明石藩儒になったので、近況を詩に託して知らせてきたのであろう。後半は朝鮮通信使について述べる。彩巖はこの月のはじめ、製述官の申維翰と筆談等で交流している(『海游録』)。本作品は国立公文書館内閣文庫蔵『彩巖集』(二〇六一四七、昌平夔旧蔵、文政九年(一八二六)友野霞舟校訂識語あり)巻上・七言古詩に収めるが、途中「君不見……」から「……失交欣」までの二二句を欠き、他の部分の字句にも異同がある。ただし写本でのみ伝わる同書その他伝本は未見。

赤石梁蛻巖見贈文柄一篇、意有所託、賦答

(印)

梁子身已蛻、尚留巖上雲、々々氣輪菌崇朝雨、洗滌後生化人文、  
赤水沈珠無畔岸、恨不身着綠華裙、幻似五台狻猊子、臯比沒趾纏香芸、海國蒼黎三十万、一時皆擢齊王筋、山鬼無力掣電遁、  
天吳海底患犀焚、贈我葵丘易牙鼎、龍文半減重千斤、一嚼青瀑瀕胸降、仁門義路喜所聞、嗚呼駿台築兮房駟死、鉄牛峽外無全

軍、小子何能支大廈、東顧西倒手足顛、況復簿書驅傲吏、玉田無人事耕耘、黃雀暮棲西城柳、寒鴉曉叫東門粉、河梁千年猶一水、頓使金枝減臭芬、閭閻少婦護充耳、侯鯖敢取野人芹、大兒小兒無楊孔、礼云樂云聚河汾、河汾弟子多白首、見我波瀾起魯斷、有時五雷碎胡桃、晞髮桑榆倚朝昕、君不見前年黃河清三日、題聖人御宇瑞霧紛、馬奔國隣一衣帶、平壤青社本於殿、大夫四牡度万里、姓申左史讀五墳、江南館舍青楓暮、相逢白雪生氤氳、玉欄潮湧赤石樓、月查婦時応問君、々々在何陋有、一麾銷費氣、君解醜叔季、君戈挽斜曛、九軫丹成憇玉杵、八行猶自致殷勤、棋盤蹀躞紅叱撥、阿戎簡要又何云、君家九兄真生鉄、身騎白馬謝俗群、重門策度接瞿喜、胡似題鳳失交欣、時顧青袍驚孤子、悲愁万斛渺不分、慧眼今謝渡河豕、画心早決負山蚊、再拜告君兮鼎之重不可問、鼎之醕不可醺、抛宝鼎兮還海角、不妨君子銘奇勳

己亥十月望燈下賦 鶴汀桂山(義樹)香公文稿(印)(印)

〈臨發疾書、恐有謬誤、鑑々〉

二三 伝服部南郭自筆「餐霞亭記」

二七・七×九二・七種。落款印「元喬／之印」(朱陰方二・

六種)「子ノ遷」(朱陽方二・四種)。南郭は宝暦九年六月二日に没しており、一一年八月の年記および落款があるのは不審。筆跡が似ているので、落款・印章を妄補したものか。ただし別筆とは見えず、そうすると自筆本からの転写者が加えたか。内容からすると、上方在住で亭主とも親しい文人の作であろう。「郭之西北隅」で松が「羅列」している近く、というこの亭は、北野あたりにあったか。「白水先生」は淀藩儒上田白水か。

#### 餐霞亭記

高舄西以章、近構于別業而扁曰餐霞亭。其地即郭之西北隅也。余私竊念、姑射真人来而所棲息乎。或曰、夫真人者深入山谷而脩道、避世厭俗、不食五穀、餐霞吐氣、豈混塵街之際哉。余曰、不然、夫真人者乘雲氣御飛龍而遊乎四海之外、此亭也雖隣塵街、其東北向广袤之野蒼茫無涯際、且距丹丘可一百里、豈曰非真人所棲息哉。直北数峰列峙而琪樹聳翠、茂林脩竹幽邃可親也。其連山之際神社仏閣、皆応真垂跡靈境也。冥昏鳴磬、諷誦之声近聞、孰与其仙樂之鏗鏘。故遊此亭則奇情契於仙客、恍惚濯塵機澄心機。可謂諸真人之妙適也。西子因遊曰白水先生之門、好學賦詩脩文而有年于此。其機鋒俊逸、才華玲瓏、一亡論矣。雖混

風塵之中、其志尤堅剛而好古嘆今。家職商賈之暇、逍遙於此亭、而餐霞吸風飲露、吐故納新、其所自適者非乎。緬望東方則叡峰摩霄、醜酬聳雲、鳩峰接眉。巍然樓閣明滅斜輝者、蓋応神帝之清廟也。淀川折東南、風飄影聳、洛浪之通濤、而河源自江之琵琶湖出、終至浪花入西海、実本邦之一大河者也。近対者、京口十里、松鬱乎羅列。微風謾々而送琴声、非糸非竹自然妙曲至尽矣。此亭也、四序之眺望、景象變然、最壯觀者也。郡人夫雅士文人緇流之輩、賦詩作文遊此亭者許多也。余有与其真人亡機、相俱雅談若旁<sup>席</sup>人也。豈異深山幽谷避世之境哉。

宝暦十一年辛巳秋八月二十五日記

与 采芝山人 鑑

服元喬(印)(印)

二四 伝太宰春台自筆「贈横谷文卿游事膳所侯行序」

二六・五×九五・九種(二枚継)。落款印「徳/夫」(朱陽方一・八種)。「横谷文卿」は横谷藍水(一七二〇〜七九、文公は字)。盲人で、鍼医であったが、高野蘭亭門の詩人としても知られた。卷五には「陪膳所侯泛湖二首」等の作品もあり、藍水が膳所藩に仕えるため江戸から近江へ移ったことは確実で、本



作品の内容を裏付ける。ただし、誤写らしきものも散見するの  
で、写しか。また、春台の『紫芝園稿』に収めず、直前の伝南  
郭自筆作品同様、落款部分が妄補である可能性も残る。

初余聞世有琵琶湖八詠詩者、而未得見之也。謂有是哉。凡天下  
以勝稱者、蓋不乏其地。而此特居東北諸路之上游西、密通<sup>（舟）</sup>皇  
都、南当走寧樂諸所道。山水之秀、風土之麗、莫有与克者。而  
景狀則比洞庭之奇、之則於此無有而於何有。既而及其偶見諸  
冊子中而試上口、乃覆醬不能為卒業、即噬而屏之不已、則又拳  
以毀裂、搏以擲地、用屐齒蹶、他鄉箕扱、卒致語糞壤而後已也。  
曰冤哉。今不問作之者為誰、乃何氏之子、猥拾此俚語、与之以  
雅名、以欺不<sup>（知）</sup>不知者之至此也。夫以湖之勝之美、莫有与京於天  
下也。如彼而蒙之以不潔者如此、非翅唐突之豔可醜而已。則豈  
不冤哉。当此時、余蓋若以朝服坐塗炭、至今如有匪澣者而矣蓋  
三十年。於茲子、谷文卿之游事膳所侯從行。乃知、湖之有詩自  
今日始。文卿雖以病明故託医、而於焉特進於技、而又聞侯好之  
有甚焉。夫以其所進於技、遇其所好、之有甚焉乎。乃環湖之勝  
攢諸一城。群山競峙、空翠与虚碧倒影、銜一鑑重出疊起、突兀  
崢嶸乎。蕩漾瀟漫中、無分上下、而洲渚之所映帶、島嶼之所出

没、沙鳥紛風飄。又仏宮虚觀之往々隱見於樹石間、陳蹟遺趾  
比々有無於藁莽、無不縹渺蒼茫玲瓏。独<sup>（慙）</sup>慙以交猷觀於此、譬猶  
如於<sup>（殿）</sup>殿上坐臥、四壁皆翠黛、又如<sup>（力）</sup>在玉壺中俛仰、天地齊琉璃。  
蓋屬目百里、指掌無遺。則知、文卿之以心見之、某在斯、某在  
斯、而支分節解不見其全牛也。乃其当月出之夕、若叢集之朝、  
侯於是命酒、披襟臨軒、授簡<sup>（力）</sup>運賦、每見其抽思從事、揣稱騁聲、  
以立成之也。未嘗不若新發乎硯、輒擊節稱善者。余在千里外想  
見之也、猶親見之矣。亦唯於此無有而於何有々。即其為湖雪冤、  
以使余至今如匪澣者灑然者、亦將於是此乎在也。抑有宋滕子京、  
為巴陵郡修岳陽樓、刻唐賢今人詩賦於其上。好事也亦至矣。侯  
豈有意耶。湖既比洞庭矣、城亦岳陽已。方今文教四布、作者隨  
与<sup>（力）</sup>、豈少其人。亦唯自<sup>（鄉）</sup>文鄉始耳。独侯之先受封於此、祭其山川  
者今教世、斯民也前代之所以直道乎。小人聞道則易使、豈以詩  
書之教徒為牛刀視之者哉。則与郡県時出守、一州隨牒在、自視  
如偶客、視民如行人、歲滿即遷去者異。況以謫居此如子京者、  
自憂之不暇、寧能及民乎哉。余所聞、侯之好有甚焉者其在斯乎。  
亦豈徒好事而為之者之比哉。文卿其勉諸。此行也、將不唯為湖  
雪冤、以使余之至今如匪澣者洒然而已。安得曰羈旅之屋。以一  
方技在此、雖日進一鍼、亦足以塞責矣。必与坐朝与譙者等列、

苦心焦神、以憂人之國為、而懷玉自憂、当仁徒讓哉。若然、則無論当其聽政、諷誦以備斟酌者、即以其所自為而不必人所獻。

即或有泛湖而下中流、四顧以誇要害之美、称德以對、亦唯以主文譎、言者無罪、聽者足戒耳。又何有橫佚以尽說、犯顔而進言者哉。是之謂溫柔敦厚之教也。即絃歌之声、亦將有相聞達四境者矣。是余所謂不唯為湖雪冤、以使余至今匪澹者洒然而已。若夫以其所善与人歲而接踵、存名蹟於此地、以使人疑於延喜帝子、而不必遠求卜名夏於西河而比之。則文卿固同所病矣。而詩与國風之歌又無扞焉。唯是精氣之所致、何俟余言。

右贈

横谷文卿游事膳所侯行序

太宰純撰（印）

二五 梁田蛻巖自筆「簡垂裕堂唐金子凡右并詩」

二七・七×一三八・五種（三枚繼）。引首印（詩の冒頭）「於道未為尊」（朱陽楷凹形、五・一×一・五種）、落款印「梁田／邦彦」（朱陰方二・二種）「景鸞／甫」（朱陽方二・一種）。享保元年（一七一六）作。文章部分は「蛻巖集」卷六・書牘に「与唐金興隆」として収め、末尾「別有和高作」云々以下（二首の

詩も）を欠き、かわりに小字双行にて「初予東都有垂裕堂八味諸体及宦播改作十二景七言絶刪旧作不入選云」と注記する。十二景は同卷四に「唐金氏垂裕堂十二咏」として全首収め、八味は同集に収めない（「蛻巖集後編」卷四に「淡路島雪」一首を拾うのみ）ための処置であろう。本文には他にも異同多く、たとえば冒頭の「幽窟」云々の一聯は版本の本文にはないなど、大幅な推敲が施されている。

簡

垂裕堂唐金子凡右（并詩）

記余年甫十二、從塾師客厩橋。一日同諸伴遊邑之大利龍海院。席上賦詩、有「幽窟玄龍臥、閒林白鶴棲」一聯。長老某閣筆嘆異、乃付浣花牋百葉為賞券。爾後三十年、凡為人作園林堂閣珍卉怪石等諸贊、前後不下數十篇、而未嘗直半文錢。不図区々八咏、化為一端袖、衣被光華、使人頓生羽毛也。顧斯袖以葛峰雲為経、以淡島雪為緯、組暮雨織朝風、殆非人間機杼中物矣。写至此、不覺發大笑。<sup>（開字）</sup>賢聞之必曰、水國人遇蟻垤為俗恒、山國人見蹄沔為淮汝、梁田生真弱措大哉、感荷薄式而主張如此也。此大不然。昔揚子雲著書、成都富人貽千金者、却而不受。士

君子愛惜名望、古今一揆。余雖不肖亦頗知、非其人与義而苟取之為恥也。今夫風流儒雅如（周字）賢、声氣千里以神交如（周字）賢、而垂

裕堂八觀固跨河帶泉偉美之所鍾、自海内諸名儒旁及華人韓使、莫不品題。乃因觀瀾宅君請余同賦、抗然得厠硃於瓊璠之側、已為過望。況又有潤筆之賜以致信誼。豈敢不感荷乎。且市井間、

嗜書史譚名理極難得、詞人才子亦不易得。江戶為食貨淵藪、翁張濁質之子、鐘鼎錦玉之家、不為尠矣。而以善詩名者、余所知

黃鶴樓益田伯隣氏一人而已。伯隣嘗從白石井君學、其於五七言近体彬々有于鱗元美之風、敝社中以斯人為一敵國。今又得与（周字）

賢締交、詩筒往復月致三四幅、則豈非吾党大快事哉。聞（周字）令閨亦有詩才。鳳凰和鳴日夜不絕、想女中李杜与古名媛齊肩、侍婢小鬟皆為島郊元白。鞦韆之昼、琵琶之夕、倡竹枝吹楊柳、無適而非佳趣者。江山外別有内助、而（周字）賢筆力益高矣。此清福也、

盛事也。雖鶴樓亦將豎降旗之不暇。如余山妻樸陋、目不識丁、除饋食外無復茹蘆葦中之可娛。使梁田景鸞不能統五噫出東閩、寔坐此耳。写至此、又不覺發大笑。右二咲、不忍自挫、遂書之

備一絮。不知（周字）賢果拊掌否。別有和高作二首附楮尾答謝。是亦笑之余爾。莫以誇大為罪惟幸。

（印）

未逢知是意中人、雲閣風台入夢新、十月梅花伝駛使、一枝鎮作案頭珍

媿謝締袍似故人、相知却有白頭新、朱絃他日為（周字）君鼓、流水高山不自珍

丙申冬十一月  
梁田（邦彦）景鸞拜  
（印）（印）

二六 伊藤東涯自筆「茶志序」

二六・六×九〇・七糎。享保二二年（一七二七）の作を翌三年に揮毫したもの。引首印「折腰」（朱陰長方一・八×〇・八糎）、落款印「長嵐ノ之印」（陽）「元ノ蔵」（陰、双辺）（朱方各一・九糎）、「長嵐」（朱陰長方二・二×一・〇糎）。三谷良朴（宗鎮）著『和漢茶誌』（享保一三年刊）への序で、『紹述先生文集』巻四に収める。これら兩者には「予以不会其趣」の後に「而辞。而以南川氏私淑先人之道」とあり、この方が文意が通じるので、目移りによる書き落としてであろう。他にも小異あり。

茶志序（印）

（印）

（印）

（印）

（印）

（印）

（印）

（印）

（印）

予性稚素少嗜好、凡彈琴圍棋、蹋鞠之戲丹青之工、一不解其趣。人事稍閒、則誦小說臨古帖、以度日耳。遇值清泉茂林之間一字衡茅、茶煙輕颺、棋声丁然外聞、則意每欣然、而未會其趣也。

原夫、前世有韻人、屏迹城市、構斗室砌怪石、啜茗乎其中、壁掛名画、几安古鼎、瓶插奇花、以自遣。世之人歎其雅趣、以虛陸之流亞。及其久也、乃至邦君達官貴游子弟、争相慕尚、會之有所、講之有式、掌之有人、而世之專門之名家焉。予之所識三谷南川氏、受其法于宗易氏之門、今宦于芸藩而寔忘其任。南川

氏嘗慕吾先人之道、從予問道。近齋跡其所輯茶志<sup>(卷三、見方)</sup>三。則凡与茶之事罔不備載。乃請弁其首。予以不會其趣、而亦不得固辭。況讀其書、殆將會其趣。乃言曰、茶尚也、自晋唐而下矣。陽羨北焙之產、龍团鳳餅之製、著方冊者可徵也。元氏而後稍失其制。而凡所云茶者、皆葉而淪之、非復古之茶。而本邦尚襲法而不<sup>(有脱)</sup>渝、則礼之失何必求諸野耶。因叙其言以広志之意云。

享保丁未之歲秋九月

伊藤長胤 (印) (印)

〔余嚮為三谷宗鎮氏叙其所編之茶誌。頃者宗鎮氏門人蘭渚多田生請手録其叙於余。校書講字之余暇、古義堂之北窓写之以贈云。戊申春正月東涯再識。〕 (印)

二七 栗翁書簡 (岡田勘右衛門宛、某年某月二九日付) 登錄  
書名「栗翁書狀」 133X/156/1

卷子本一軸、軸長一九・七糎。萌黄色牡丹唐草織出裂表紙 (一七・七×一五・二糎、二枚継)、見返無地鳥の子紙。牙軸。外題なし、金箔題簽を貼付するのみ。本紙一五・三×四三・三糎、薄紅色料紙。差出人の栗翁は中村栗園か。

前略失敬、陳者又候御内話申上度儀共有之候二付、小僕上堂可仕筈之処、自然御來人モ有之候てハト差扣申候。何卒申上兼候得共、御方出<sup>(附)</sup>殿掛け一寸御立寄被下度奉希上候。

廿九日 頓首

(以下、端裏切継)

岡田勘右衛門様 栗翁

上置 (札一件/山崎一件)